

# 現代文明の行方と生物多様性

安田 喜憲

Written by yoshinori yasuda

## 生命は歴史的存在

私たちの命は父と母からいただいたもの、その父と母の命は祖父と祖母からいただいたもの、そしてその祖父と祖母の命は……というように、私たちが今生きているのは過去の「生命の連鎖」のおかげなのである。その「生命の連鎖」がなければ、私も、あなたも、僕も、君も君の彼女もこの地球上には存在しえない。ところが現代人はこの生命の連鎖の尊さ、その生命の連鎖の歴史性をまったく忘却し、あたかも自分は一人でこの世に生まれ、そして自分の欲望のままに生きることを許された存在であるかのように錯覚している。

過去への感謝、生命の連鎖への感謝の喪失が現代文明の一つの特質である。

それは現代人が生命の連鎖と、生きとし生けるものに対して祈

る心を喪失したこともある。「お金が儲かりますように」「出世しますように」と自分の欲望を満足させるために祈る人はいても、過去への深い感謝の中で、この地球の生命の連鎖、生きとし生けるものの生命に畏敬の念を持ち、その尊さに祈りをささげる人は少なくなつた。過去への感謝を忘れた現代人は、未来への責任も放棄した。

自分の命をはじめ、生命が歴史的存在であることを忘却した現代人は、未来への責任をも放棄することになった。

かつて森の民、日本人は未来の子孫のために木を植えた。私は幼い頃、祖父とよく植林にかけた。祖父は「この木は喜憲が大きくなる頃には立派な木になっている」と、よく言ったものだ。その祖父の言葉に象徴されるように、「自分が今やっていることは、未来世代のためにやっていることである」という明白な自覚が、ほんの少し前の日本人にはあった。

しかし、輸入木材によって日本の林業は衰退し、祖父が植林







敦賀市の豊かな自然の中にある中池見湿原

ぼがあり、鳥が飛び、虫が鳴く、まるで田園風景の中にある都市そのものだった。どこにも超音速ジェットや、リニアモーターカーは描かれていなかった。

たった30年で日本人の理想とする未来像はかくも変化したのである。私が21世紀の「ほくどう銀河プラン」に抗議して、「東北桃源郷構想」を提示してから30年後に、まさに私の予言どおりの未来像を多くの国民が持つようになったのである。

21世紀には、このまま革命的な食糧生産に関する技術革新がない限り、食料危機が深刻になる。こうした時代を目前にひかえた未来構想としてまず提案せねばならないことは、美しくて豊かな農山漁村の創造であり、第1次産業で確実に食料を獲得できる方策の立案である。東北にあるいくつかの内陸盆地や三陸沿岸を桃源郷にし、海岸地帯の文明融合センターとの間をむすぶ。その間にももちろんリニアモーターカーが走ることはおおいにけっこうである。しかし、やっておかねばならないことは美しくて豊かな農山漁村の創造である。これらなくしては、ハイテク都市も絵に画いた餅に終わる。

## 生物多様性を守った中池見湿原の保全

1990年代後半に、私は大阪ガスと深いかわりを持つことになった。それは福井県敦賀市中池見湿原の保全をめぐるのである。私の専門は花粉分析といって、泥炭などによく保存されている花粉の化石を分析して、過去の森林の変遷や気候変動を復元研究するものである。

これまでのボーリング調査で、私は中池見湿原には60mもの厚い泥炭が堆積し、湿原は生物多様性の宝庫であることを突き止めていた。60mもの連続した泥炭の堆積は、世界的に見てもきわめて貴重なものだった。しかもそこでは、深田といつて腰まで泥炭につかりながら人々が水田を耕す、伝統的な農業がまだ営まれていた。

ところが、そこに液化天然ガスの貯留タンクを建設する計画が持ち上がってきたのである。大阪ガスは敦賀港を改築し、大型タンカーが係留できるようにして、中池見湿原に液化天然ガスを貯留する準備を始めていた。

しかし、中池見湿原は生物多様性の宝庫であり、きわめて厚い泥炭層が堆積し、世界的に見ても貴重な湿原だった。それを何とか保全したいということで運動が始まった。

その中池見湿原に貯留される予定の天然ガスは、近畿圏や中部圏の人々の将来のエネルギー資源として、なくてはならないものとなるはずであった。エネルギー資源は人間が快適な暮らしを営む上で必要不可欠である。エネルギーをとるか、それとも生物多様性をとるかの選択を、その時せまられた。

私は大阪ガスの関係者と何度も相談し、中池見湿原に湿原を研究する博物館を建設するとともに、湿原の一部を保全し、古い民家を移築し、伝統的な深田での水田農業を維持する計画を立てた。大阪ガスの皆様は、それに全面的に協力をしてくれ、立

派な博物館と野外里山ミュージアムが完成した。

しかし、それでも湿原が破壊されることは、なんとしても心が痛かった。やはり、なんとか湿原を無傷で守れないか。「湿原の保全とエネルギー問題の共存を解決するために、どうか私にあと10年の時間をください」とお願いした。結局、工事はむこう10年間凍結されることになった。

大げさに聞こえるかもしれないが、この中池見湿原が破壊されたら、おそらく私の命もないだろうと覚悟していた。かつて同じ福井県蛇ヶ上池湿原がスキー場として破壊されたことがあった。それを担当された町長さんが、ガンで亡くなったことも身近で知っていた。

そして結局、天が私に味方をしてくれた。大阪ガスは、将来の都市ガス需要および設備計画を見直し、液化天然ガスの貯留タンクを建設することを2002年(平成14年)に中止したのである。

かつて私はレバノン杉の救済活動を行ったことがある。その時にも、何か命をいただいた気がしたが、今回も同じだった。自然の生きとし生けるものの命を救うことは、自分の命を救うことなのだと思う。

そして、大阪ガスは中池見湿原の博物館と野外ミュージアムを湿原本体ともども、2005年(平成17年)に、敦賀市にすべて寄贈したのである。私はその英断に心から感謝した。

こうして、中池見湿原の生物多様性は守られ、ギネスブックにもある価値のある60mもの厚い泥炭層は守られたのである。

今は敦賀市の管理のもと、土曜・日曜日には多くの市民がためかけ、生物多様性を学び、日本人が世界にほこるべき里山の文化を学び体験し、「過去への感謝と未来への責任」を学習する貴重な場となっている。その価値は今後ますます高まることであろう。中池見湿原が残されたことは、後世の人々にも、きっと高く評価され感謝されることになるはずである。

CEL

◎安田 喜憲 (やすだ・よしのり)

国際日本文化研究センター教授。1946年三重県出身。1970年立命館大学文学部地理学科卒業、72年東北大学大学院理学研究科地理学専攻修士課程修了、74年同大学大学院理学研究科地理学専攻博士課程中退、77年広島大学総合科学部助手、88年国際日本文化研究センター助教を経て、94年より現職。専攻は地理学・環境考古学。環境や文明に関する著作を多数手掛ける。主な著書は、『生命文明の世紀へ』（第三文明社）、『続く世代に何を渡すのか』（共著、武田計測先端財団）、『環境考古学事始』（洋泉社）など。